低質量WIMP探索のための 大光量液体アルゴン検出器開発

ICEPPシンポジウム 2020/02/16 早稲田大学 寄田研究室 青山 一天 15ページ(実質13ページ)

ANKOK実験:液体Arを用いたWIMPの直接探索実験

ICEPP Symposium

□ WIMP直接探索実験

• Sig:WIMP-核子弾性散乱

BG: ER event, 中性子, ...etc

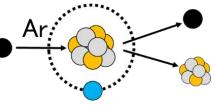


NR/ERの分離がWIMP探索のカギ

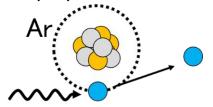
ロ 液体Ar光検出器

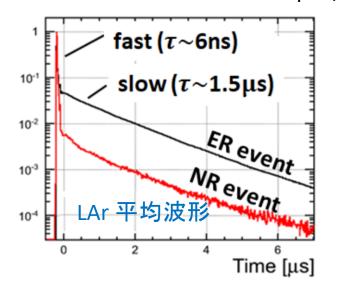
- 標的物質:液体Ar(LAr, 87K)
- 波形弁別(PSD)によるER/NR分離
 - 検出光量向上により分離能力向上世界最大光量 = 9.1 p.e./keVee (DarkSide-10, 2012年)

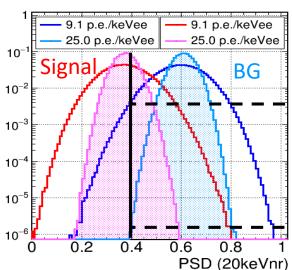
- Nuclear Recoil (NR)
 - WIMP
 - 中性子



- Electron Recoil (ER)
 - γ線
 - (電子)







PSD ER eventの染み出し 光量比較(toyMC)

9.1 p.e./keVee : $O(10^{-3})$

25 p.e./keVee : $O(<10^{-6})$

主要背景事象と分離能力への要請

ICEPP Symposium

ロ 主な背景事象

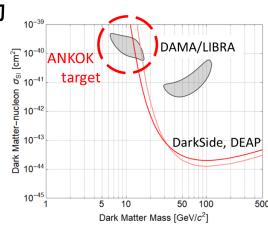
- ³⁹Ar (β線源, 1Bq/kg)
 - LAr中に含まれる、内部ERバックグラウンド

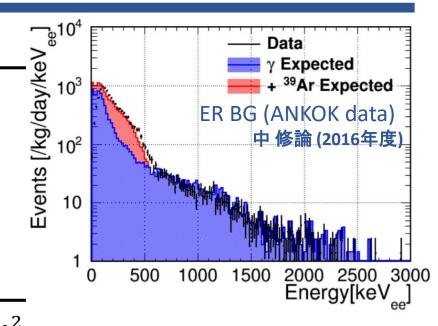


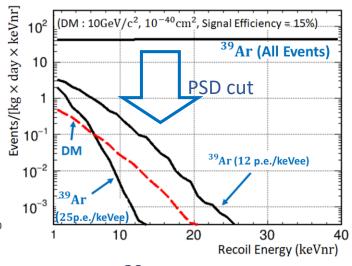
PSDにより解析的に分離、除去

ロ 必要な分離能力

- $M_{WIMP} \sim 10 \text{ GeV/c}^2$, $\sigma_{WIMP} \sim 10^{-40} \text{ cm}^2$
 - 必要なPSD分離能力
 - $> 1 \times 10^3$ @10keVnr
 - $> 1 \times 10^5$ @20keVnr $\frac{5}{8}$ 10-41 target
- ・ 検出光量とPSD能力
 - 25 p.e./keVee で WIMP event以下に







³⁹Ar event数 (toyMC)

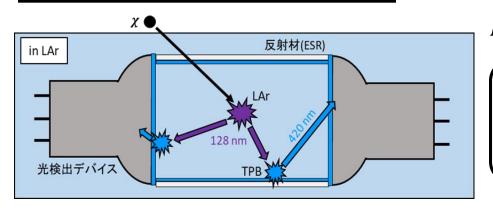


光量増加により0 ER BGを実現可能

LAr検出器の光収集効率

ICEPP Symposium

口 LAr光収集効率



 $LY = N_{LAr} \times A_{VUV} \epsilon_{TPB} \times A_{VL} \epsilon_{QE}$

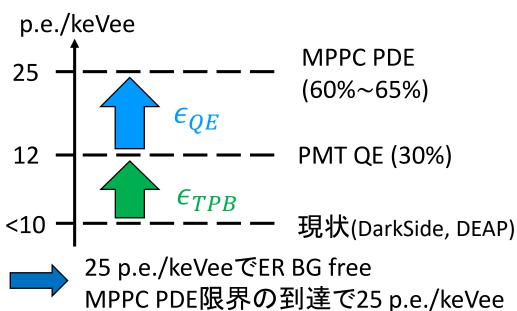
「N_{LAr} : LAr発光量 = 40 photon/keVee

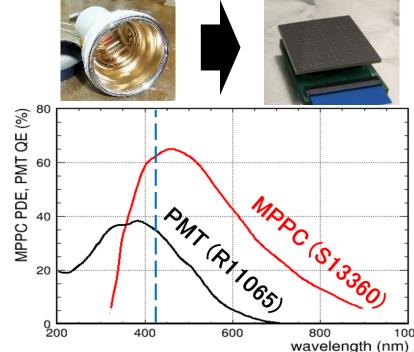
A_{**} : アクセプタンス (~100%)

 ϵ_{TPB} : TPB の波長変換効率

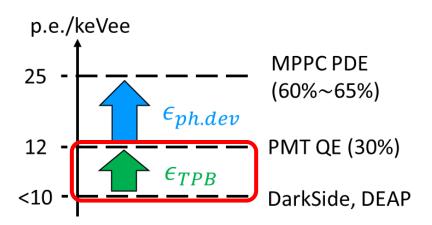
 $\epsilon_{ph.dev}$: 光検出デバイス感度

ロ LAr検出器の光量限界





Topic1. TPB蒸着技術の最適化



真空蒸着手法とTPB表面状態

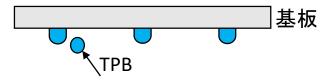
ICEPP Symposium

口真空蒸着法

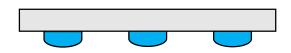
- 薄膜形成手法の一種
- 真空中で蒸着物を加熱/昇華させて 基板に付着させる

ロー般的な薄膜形成過程

1. 材料が基板面に入射し、反射or吸着 凝集することで核を形成

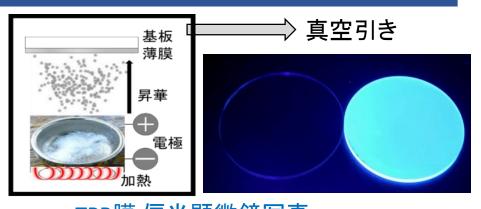


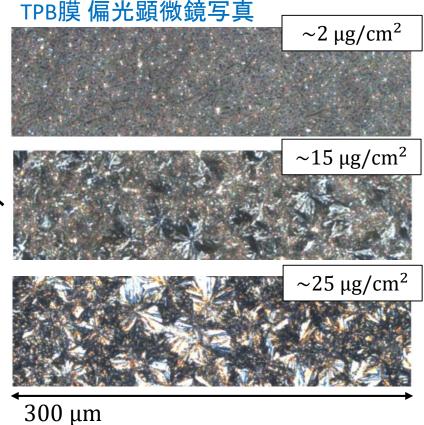
 その後入射した分子は段差部分で止まり、 核が成長していく



3. 次第に核同士が合体して、連続膜になる



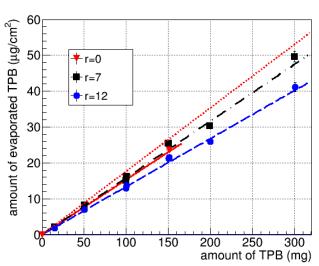


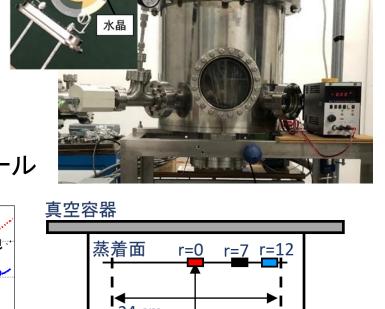


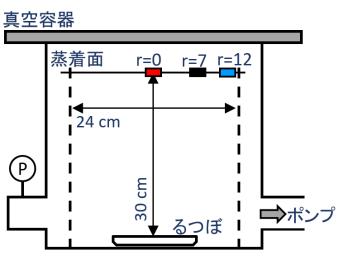
TPB蒸着システム

口真空蒸着装置

- ϕ 420 mm, h400 mm
- 蒸着面の高さ~30 cm
- QCMによる蒸着量測定
- 真空度:~5×10⁻³ Pa → 平均自由行程~1 m
- ヒーター電圧のみによる 蒸着プロセスのコントロール

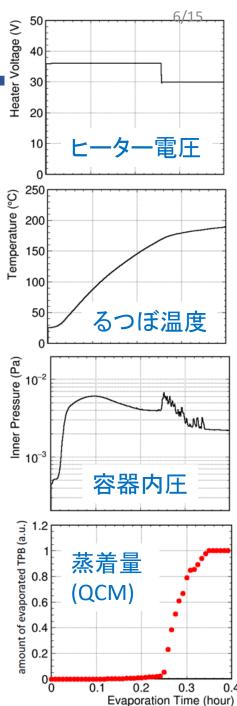








TPB蒸着量の定量化と、再現性の保証



TPB薄膜の光学特性評価

波長変換効率 可視光透過率

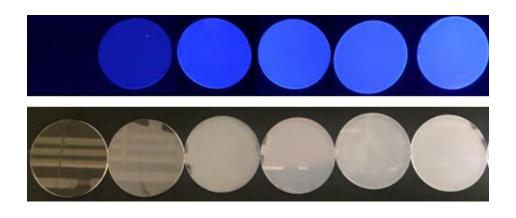
ICEPP Symposium

ロ 測定セットアップ

- 光源
 - 波長変換効率: GAr + ²⁴¹Am
 - 可視光透過率: blue LED
- 光検出 : PMT

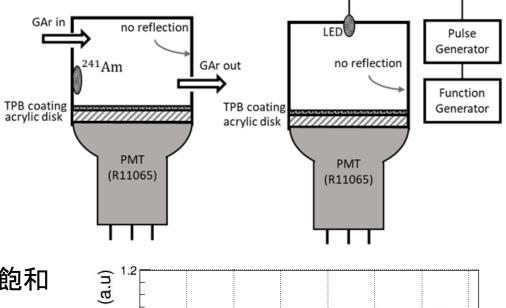
口測定結果

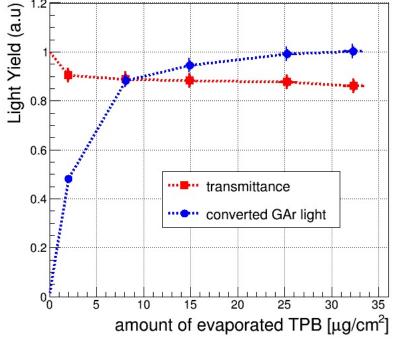
- 波長変換効率: 25 μg/cm²以上で飽和
- 可視光透過率: TPB増加 → 低下





30 μg/cm² 付近で蒸着することを決定



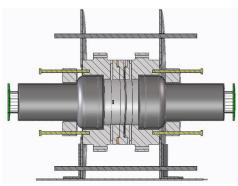


1相型LAr検出器の収集光量

ICEPP Symposium

□ LAr検出器

- 有感領域: φ6.4 cm , h5 cm (PTFE筐体)
- 光検出デバイス : PMT → QE~30% (HAMAMATSU,R11065)
- TPB薄膜: PMT~30 μg/cm²
 ESR ~40 μg/cm²



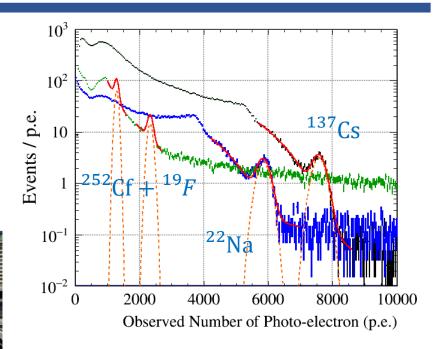


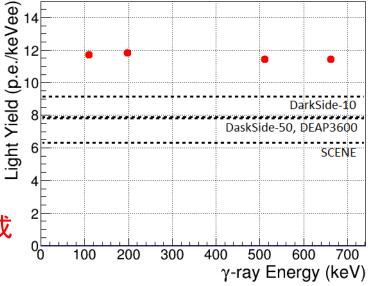
ロγ線源による光量測定

γ線源: ¹³⁷Cs(662keV), ²²Na(511keV)
 ²⁵²Cf + ¹⁹F(n, n' γ) (110, 197 keV)

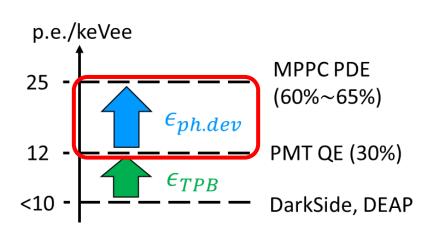


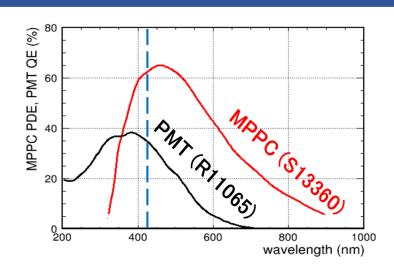
約11.5 p.e./keVeeの世界最大光量を達成 PMT QEによる収集光量限界





Topic2. TSV-MPPC Arrayの導入



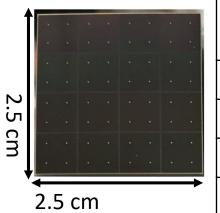


MPPC 光検出器の導入

ICEPP Symposium

□ TSV-MPPC Array (S13361-60AE-4)** ※ ** にはピクセルサイズ(50∪と75U)

- Si 貫通電極→ 小デットスペース@筐体部分
- 4×4chのArrayタイプ



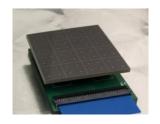
| | PMT | TSV MPPC | |
|------------|---------|----------|---------|
| | | 50U | 75U |
| V_{bias} | >1000 V | ~50 V | ~50 V |
| 物質量 | 大 | 小 | 小 |
| 時定数 | 数ns | ~50 ns | ~100 ns |
| 検出効率 | ~30% | ~55% | ~65% |

□ MPPC導入への課題

- MPPC接続による信号まとめ読み出し手法の決定
- PSDのための波形情報取得
- 低温耐性(浜ホト未保証)

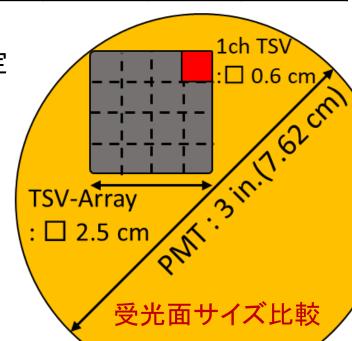








接続回路を実装した読み出し基板を製作



読出し回路の設計・製作

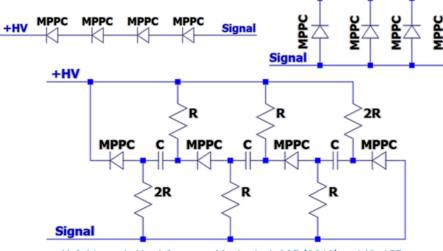
ICEPP Symposium

□ MPPC接続回路

| | V_{OP} | 時定数 | Gain |
|--------|----------|-----|------|
| 直列 | × | 0 | × |
| 並列 | 0 | × | 0 |
| ハイブリット | 0 | 0 | × |



LAr光のPSDを悪化させないように、 ハイブリット接続を採用

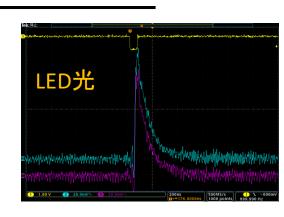


+HV

K. Ieki, et al., Nucl. Instrum. Methods A 925 (2019) pp148-155

ロ TSV-MPPC Array 読出し基板

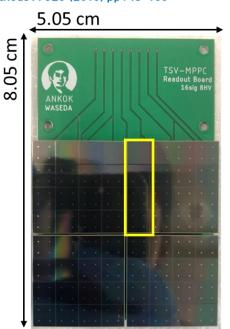
- 4 Array / 1 board
 - 4MPPC / 1signal線
 - 8MPPC / 1HV線
- 64ch MPPC
 - → 16signal, 8HV



MPPC側









TSV-MPPC ArrayのLAr試験

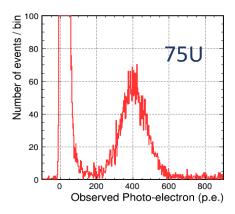
ICEPP Symposium

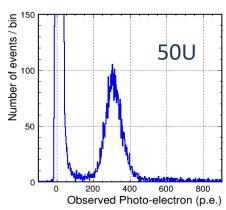
□ MPPC LAr検出器

- 有感領域: □5.05 cm, h5.4 cm
- 光検出デバイス : TSV-MPPC Array (75U and 50U for R&D)
- TPB薄膜: MPPC~30 μg/cm²
 ESR ~40 μg/cm²
- ²⁴¹Amを設置 (59.5 keV γ線)

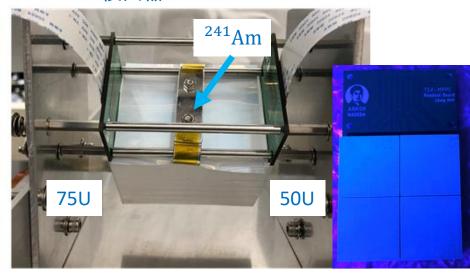
ロ ²⁴¹Am イベント (1月 Run)

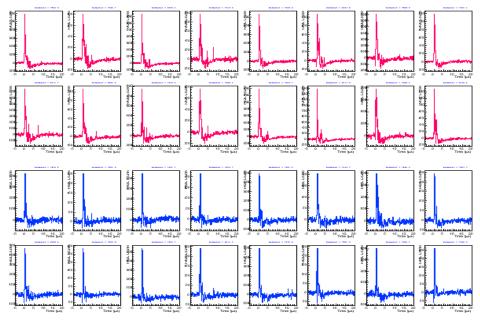
- 全32チャンネルでLAr光を検出
- ²⁴¹Am 59.5 keV γ線ピークを確認





MPPC LAr検出器





TSV-MPPC 検出器の光量評価 1/2

ICEPP Symposium

積分

Time (µs)

Time (µs)

20

15

ロ現状のMPPC基板の課題

アンダーシュートが存在

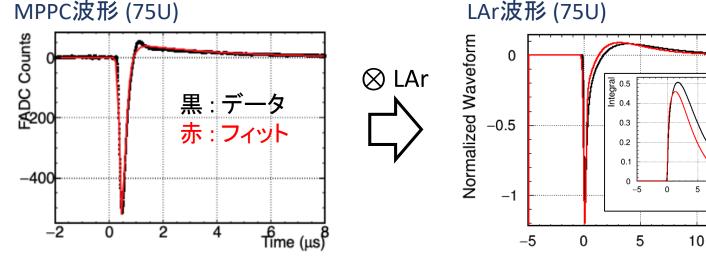
- = 全範囲積分すると0
- Gainが小さく、ピーク分離せず
- = 数p.e.ピークからGain較正不可



➡ LAr波形の最初の1μsから真の光量を推定し、暫定的に算出

ロ MPPC出力のアンダーシュート補正 (C_{MPPC})

- ns パルスレーザーをLAr中で照射
- MPPC+読出し回路の応答特性を関数化
- MPPC波形 ⊗ LAr発光分布





積分幅に対応するスケールファクター を算出 (積分幅1μs)

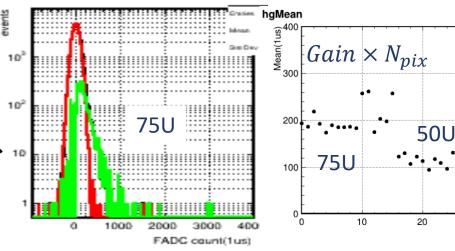
hgMean

ICEPP Symposium

ロ Gain×N_{pix}の算出

$(N_{pix}: 1$ 光子に対して何pixel分の出力があるか)

- レーザー runで算出
- 小光量に設定-> 2p.e.以上はクロストーク
- ペデスタル(laser off)を差っ引き、 $_{10}$ その平均値= $Gain_{1\mu s} \times N_{pix}$



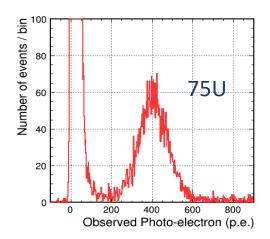
ロ光量の算出

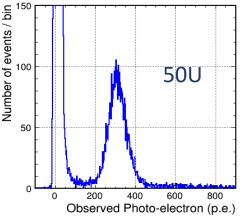
・ 光量を以下のように算出

$$LY = \frac{Q_{Am}}{Gain_{1\mu s} \times N_{pix}} \times \frac{1}{C_{MPPC}}$$



26.1 ± 5.2 p. e./keVee (期待光量~ 23 p.e./keVee)





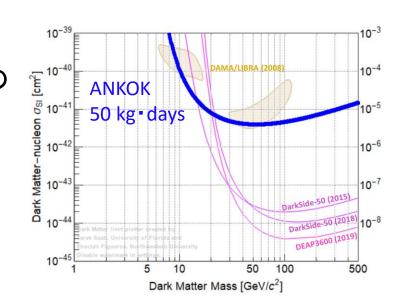
ICEPP Symposium

ロまとめ

- ANKOK実験はLArを用いたWIMP直接探索実験
- 検出光量向上による高感度化に主眼を置き、以下を行った
 - TPB蒸着技術の最適化
 - TSV-MPPC Arrayの導入
- TPB蒸着の最適化により11.5 p.e./keVeeの世界最大光量を達成
- TSV-MPPC ArrayのLAr環境下での駆動を確認 → 26.1 ± 5.2 p.e./keVee

□今後の展望

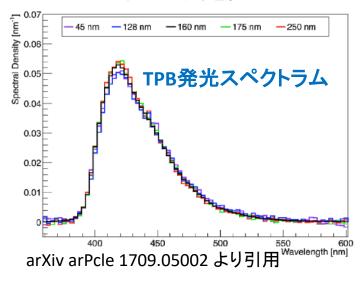
 TSV-MPPC Arrayを用いたWIMP探索用の 検出器を構築し、1 kg*50 days以上の 実験を行う。



ICEPP Symposium

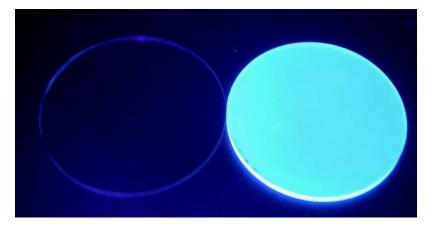
□波長変換材

- 真空紫外光を吸収し、可視光(420 nm)で発光
- 発光時定数がLAr蛍光に対して十分短い
- 極低温下でもその性質を変えない





LAr蛍光の波長変換材に 適している



TPBあり/なし比較 (withブラックライト)

□諸性質

• 白色粉状の物質



| 分子式 | $C_{28}H_{22}$ | |
|------------|-------------------------|--|
| 分子直径 | ~1nm | |
| 密度 | 1.079 g/cm ³ | |
| 融点(@1 atm) | 207~209 °C | |
| 沸点(@1 atm) | 556.1 ℃ | |

TPB 波長変換効率 測定

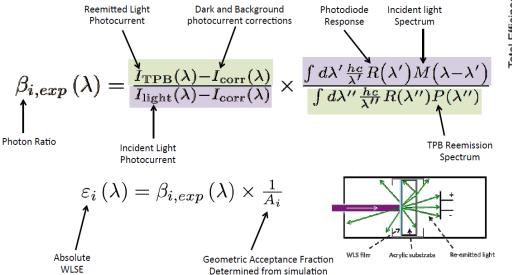


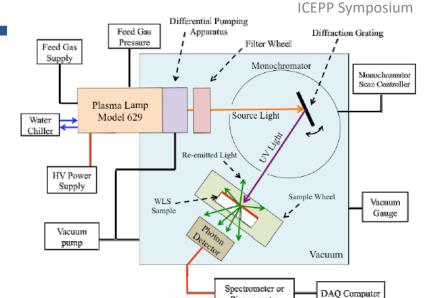


Measurements of the Intrinsic Quantum Efficiency and Visible Reemission Spectrum of Tetraphenyl Butadiene Thin Films for Incident Vacuum Ultraviolet Light

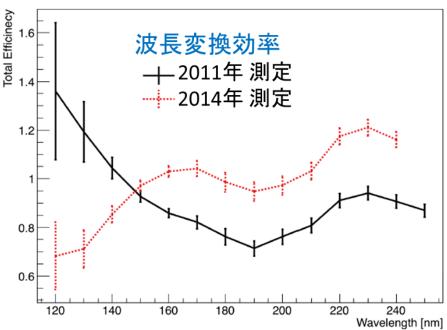
> Christopher Benson Dr. Gabriel Orebi Gann, Dr. Victor Gehman

September 23rd, 2017 LIDINE 2017, SLAC National Accelerator Laboratory



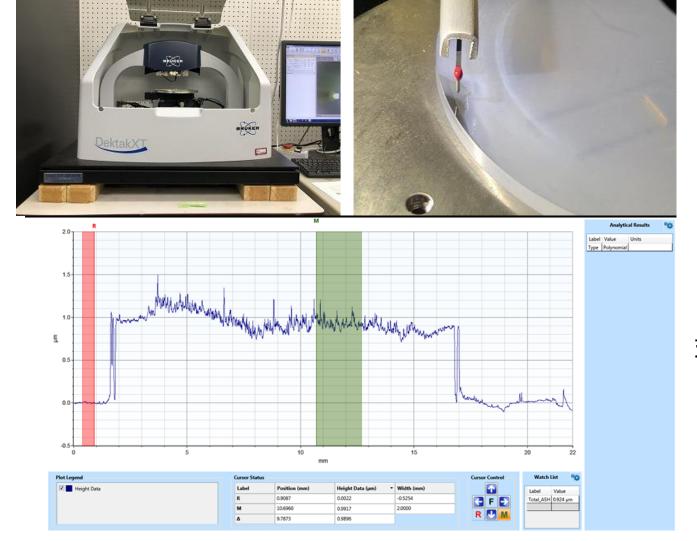


Picoammeter



膜厚測定

測定装置: Dektak 6M

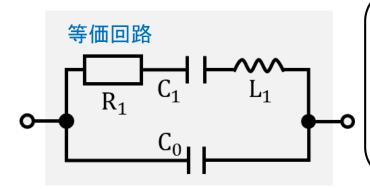


充填率~30%

ICEPP Symposium

- 水晶発振子マイクロバランス (Quartz Crystal Microbalance , QCM)
 - ~100 ng オーダーの質量測定ができるデバイス
 - 水晶円板を電極で挟んだ発振子

$$f_0 = \frac{1}{2\pi\sqrt{\underline{L_1} \times C_1}}$$

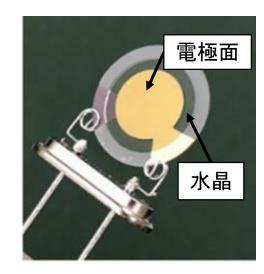


 C_0 : 電極容量 + 浮遊容量

C₁:水晶の伸縮/可塑性

L₁:振動部分の質量に相当

R₁:内部摩擦、音響損失など



・ 電極面に物質が固着すると、発振周波数が減少する



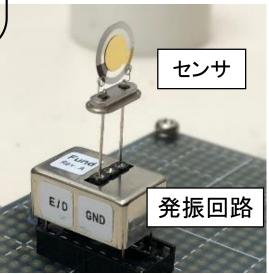
周波数変化量から、付着量を測定できる

$$\Delta m \propto \frac{\Delta F}{A}$$

´Δm: 固着量

ΔF:発振周波数変化

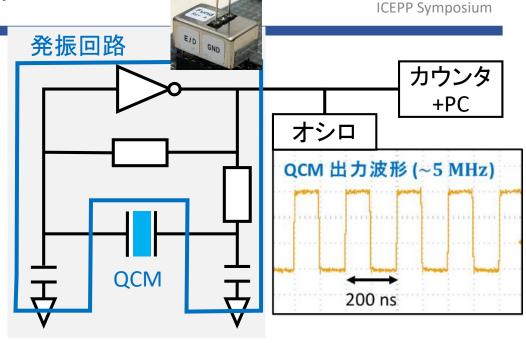
A : 電極面積



QCM 測定セットアップ

□ QCMセンサ

| メーカー | 多摩デバイス |
|-------|---------------------------------------|
| 基準振動数 | 5 MHz |
| 電極サイズ | ϕ 5.0 mm |
| 測定感度 | 3.47 ng/Hz |
| 測定レンジ | $300 \text{ ng} \sim 100 \mu\text{g}$ |

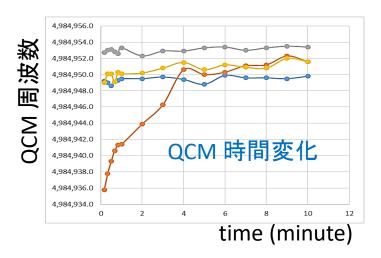


□ 蒸着装置内への導入

- ピンフィードスルーを介して容器内部に導入
- 容器内では50cm分の延長ケーブルの先にQCMを設置





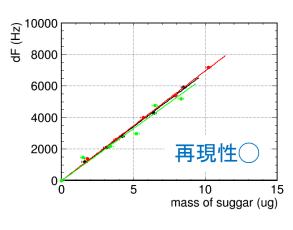


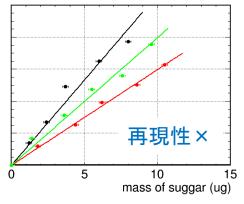
QCMのキャリブレーション

ICEPP Symposium

■ QCMの個体差と測定再現性

- ▶ 砂糖水溶液を用いて、付着量と周波数変化の関係を確認
 - 水溶液の質量を測りながら、電極面に滴下
 - 滴下後、乾燥させ周波数変化を測定
 - ▶ 5個体検査 -> 3個体が再現性O





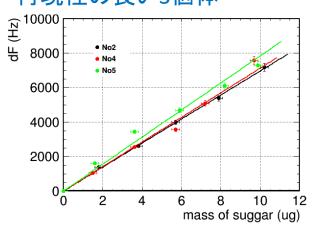


再現性の良い3個体

周波数変化 ΔF から蒸着膜厚 Δt に変換

$$\Delta t = \frac{\Delta F}{\alpha \times A} \times \frac{1}{\rho_{TPB}}$$

 $\Delta F_{suggar} = lpha imes m_{suggar}$ TPBの密度 : $ho_{TPB} = 1.079 ext{ g/cm}^3$ QCM電極面積 : $A = 2.5^2 \pi ext{ mm}^2$

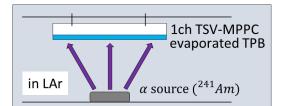


PDE測定 (Gain calibration)

ICEPP Symposium

LAr波長変換光に対する光子検出効率 (PDE) を測定

- 受光面に期待される光子数: $\mu_{expected} = 2400$ photon
- Amイベントの入射光子数と検出光子数との比をPDEとする



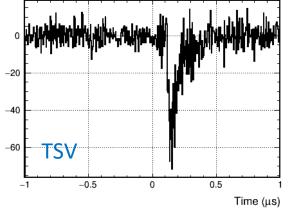
- Gain/ N_{pix}
 - LEDデータを用いて算出 (光量=few p.e.)
 - 光量分布を以下の関数でfit

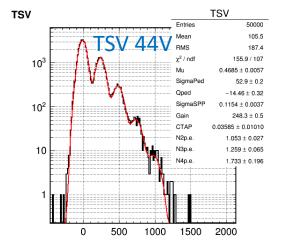
$$f(x) = P(0; \mu)Gaus(Q_{ped}, \sigma_{ped})$$

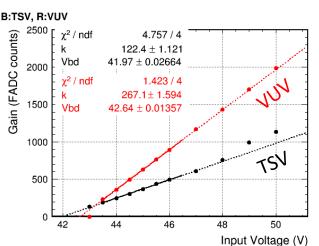
$$+(1 - X)P(1; \mu)Gaus(Q_{ped} + Gain, \sqrt{\sigma_{ped} + \sigma_{SPP}})$$

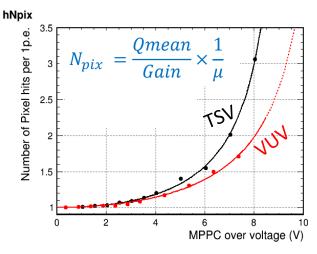
$$+nGaus$$

• Gain ~(2.05 ± 0.19) × 10⁶ (cf. スペックシート: 1.9 × 10⁶) Npix: Vov が大きいほど大







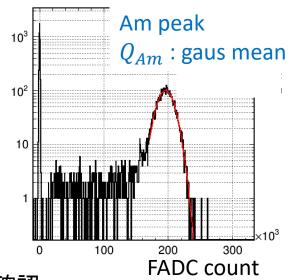


ICEPP Symposium

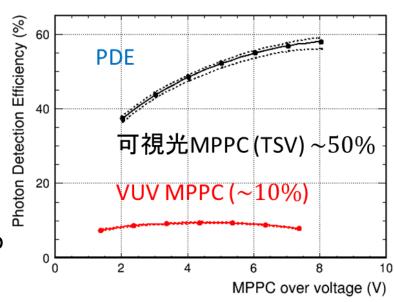
● PDEを以下の式で算出

$$PDE = \frac{Q_{Am}}{Gain} \times \frac{1}{N_{pix}} \times C_{ocupancy} \times \frac{1}{\mu_{expected}}$$
検出光子数 立体角より計算

 $(C_{ocupacy}: 同一pixelに入る分を補正)$



- 測定結果
 - 既にLAr運用実績があるVUVタイプと同様に、以下を確認
 - ✓ LAr蛍光の読み出しが可能 (w/ TPB)
 - ✓ Gain/NpixがVovに伴い上昇
 - TSVのLAr+TPBに対するPDEが>50% Vovが大きいほどPDE 大
- TSV-MPPCについて、以下をクリア
 - ✓ LArの極低温環境下 (87 K)で駆動する
 - ✓ LAr波長変換光 (420 nm)に高い感度を持つ
 - 3. 十分な光検出面積を確保できる

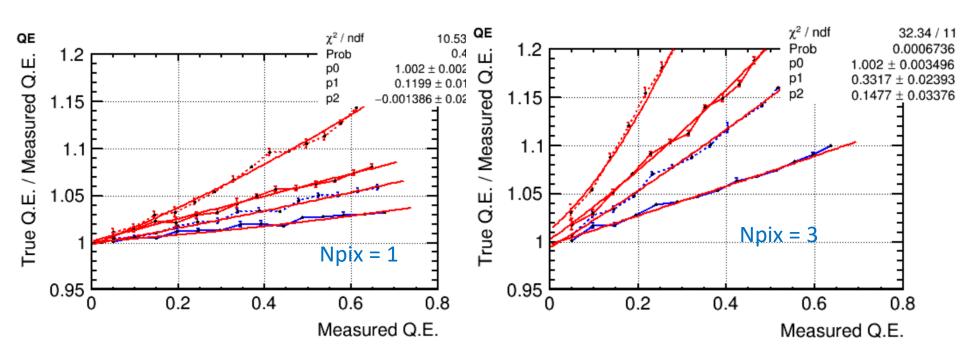


Cocupancy:同一pixelに入る確率補正

ICEPP Symposium

以下のように toyMC でAm 波形を再現し、補正ファクターを決定

- Fast, Slowの時定数 10ns, 1.5 us Slow/Total = 0.25 にしたがい発光時間を乱数で決定
- その時間を起点としてたMPPCの応答波形をExp function (50U:40ns, 100U: 160ns)を生成
- 1pixあたり複数の光電子がありかつその波形が重なり合う場合、 足しあげるのではなく最大値をとるようにする
- 最後に波形のヒストグラムを積分して補正後の光量に換算する



MPPCのマージ回路

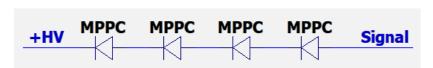
ICEPP Symposium

Gain $\propto C_{MPPC}$

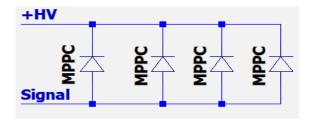
 $\tau = RC$

受光面積を確保しつつ、チャンネル数を抑えるためにマージ回路を実装する

- 直列
 - ○時定数が短くなる
 - × Gainが減少
 - × 必要印加電圧が段数に比例



- 並列
 - 必要印加電圧が増加しない
 - ◯ Gainが増加
 - × 時定数が長くなる



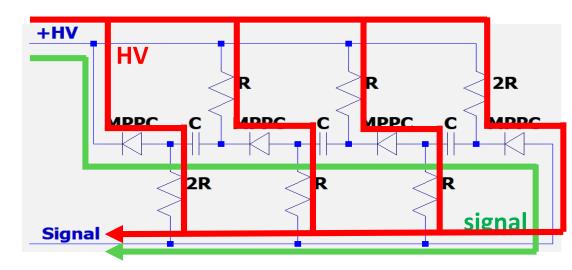
● ハイブリッド (MEGを参考) K. Ieki, et al., Nucl. Instrum. Methods A 925 (2019) pp148-155

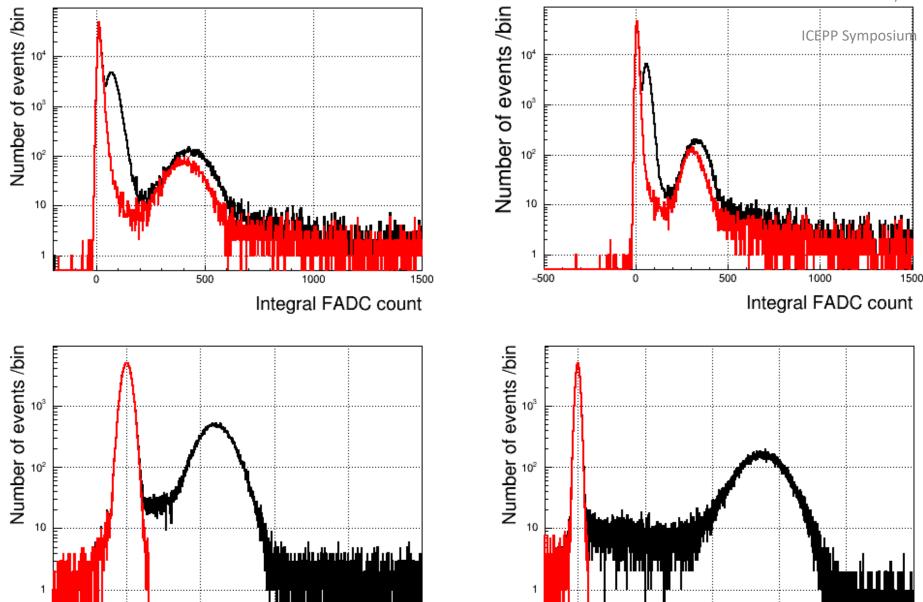
印加電圧と信号のラインが異なる



直列/並列のいいとこ取り

- ○時定数が短くなる
- 必要印加電圧が増加しない
- × Gainが減少

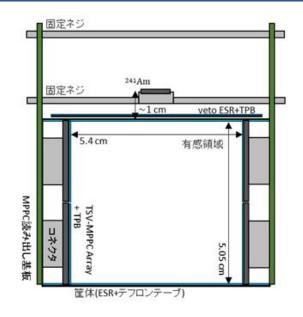


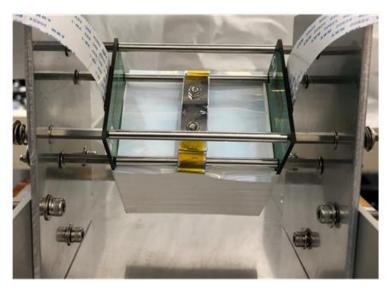


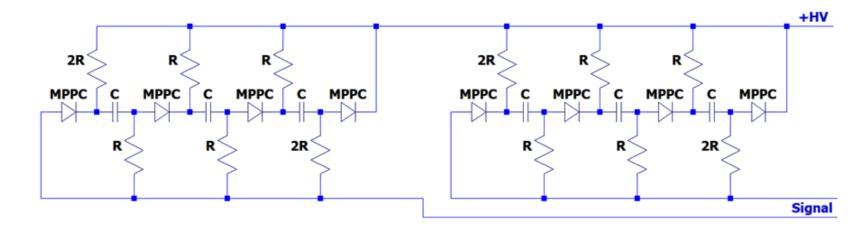
Integral FADC count

-1000

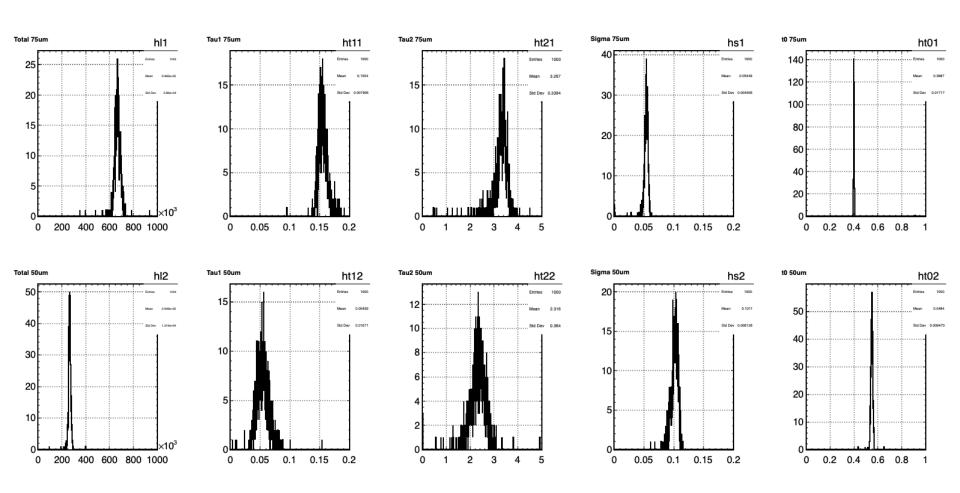
Integral FADC count



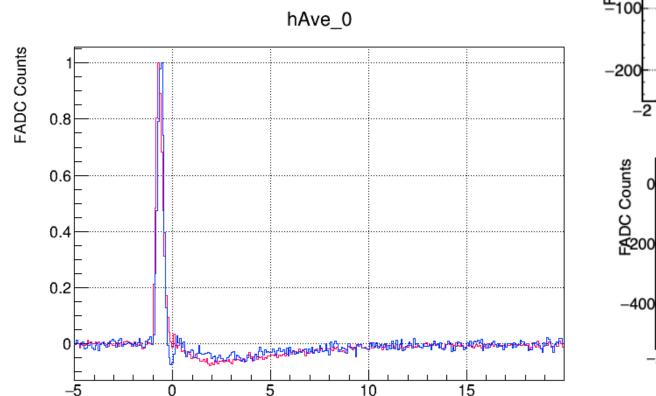




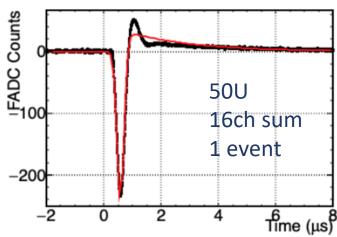
ICEPP Symposium

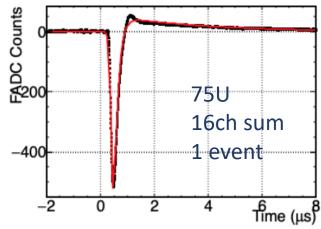


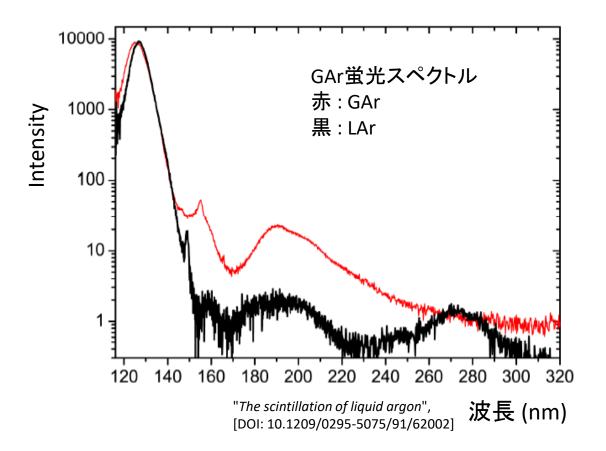
$$f_{\text{MPPC}}(t) = -A \times \left(\text{exGaus}\left(t; t_0, \frac{1}{\tau_1}, \sigma\right) - \text{exGaus}\left(t; t_0, \frac{1}{\tau_2}, \sigma\right) \right)$$



Time (µs)







TSV-MPPCのPDEをスペック通り(Vov=6V)かつ、75Uと50Uに20photonづつ分配されることを仮定した場合に、期待される光量は 20 photon/keVee*53% + 20 photon/keVee*62% = 23 p.e./keVee

